



月潟中学校 学校だより

翔 舞

第14号

令和6年2月14日
発行
新潟市立月潟中学校

新潟市南区月潟740

父のこと

校長 小竹 智

私の父はもう30年以上前に病気で亡くなりました。もし、今生きていれば86歳です。

私の父親は、高校へは進学はしませんでした。父は中学校を卒業後、鉄工所へ見習いとして勤めはじめます。

そこを20年近く勤め、独立し自分で鉄工所を始めます。従業員はほんの二、三名の小さな小さな工場です。土日も、ほぼなしで働きました。だから、私は小学生や中学生のときに家族で遊びに出かけたという記憶がほとんど、ありません。

中卒であった父は、子どもから見ると仕事をするのに苦労していたように見えました。図面にある部材の長さや角度が分からないとき、計算するのではなく、大きな図を書いて実測していました。上級の資格をとるのも、独学で時間をかけて勉強していました。

子どもである私から見ると、お金を稼ぐため、生活のためといっても、なんでそんな苦労をしているのかと思いました。

私が高校生のころ、父親の運転する車に乗ったとき、たまたま通った道で、父は車を突然止め、「あそこの建物が、この前立てた小屋」「こっちの外階段も俺の仕事」と、うれしそうに話します。私からは苦労に見えるけど、父は、顧客のために、自分のために仕事をするのが生きが이었다ということ、自分の仕事への誇りをもっていただけに気がつきました。私からみれば苦労でも、父親本人にとっては、それは決して苦労だけではなく、生きがいそのものだったのだと思います。

父親の口癖「お金も知恵も財産、お金は使えば減るが、知恵は使えば使うほど増える。知恵をつかえ、知恵を増やせ」苦労した父の言葉として身に浸みます。

私が人に知恵を与える仕事である教員になったとき、父はたいそう喜んでくれました。そのほんの数年後、父は病で亡くなりました。父が亡くなってもその思いを大切に、そして、自分自身の生きがいのため、中学生に知恵つけさせること、知恵を使わせることに努力してきました。

還暦を迎えた今の私の姿をみて、頑固で寡黙だった父も少しはほめてくれているかなと思います。

これからどんなに時代が変わっても、皆さんが自分の夢をもち、自分の生きがいを見いだし、たとえ苦労をしても、その実現に向け努力することを忘れないで欲しいと願い、今日は父の話をしました。

(2月13日 全校朝会講話より)

